

【新規1】^{きたまえぶね きこうち}湾曲した入江に沿って計画された北前船寄港地の港町

佐渡市^{さどし おぎまち}小木町伝統的建造物群保存地区

所在地 佐渡市小木町の一部

面積 約13.3ヘクタール

選定基準 (二) 伝統的建造物群及び地割がよく旧態を保持しているもの

佐渡市は日本海側最大の離島である佐渡島の全域であり、小木町は小木半島の東側に位置する。慶長8年(1603)に佐渡代官として大久保長安^{おおくほながやす}が入国し、長安の家臣である原宗^{はらそう}勇^{ゆう}は小木港を整備し、元和元年(1615)から「内の潤」と呼ばれる円弧状の湾に沿って町立が進められた。享和2年(1802)に小木沖を震源とする地震が発生し、土地が隆起し、海岸線も40メートル余り後退した。このため帆船が町場に近接できず、円弧状の地形に沿って「三味線堀」と呼ばれる堀^{かいさく}が開削された。しかし土砂等の流入により次第に堀としての機能が失われ、文政7年(1824)の火災を契機に三味線堀は埋め立てられ、堀の跡地にも町立され町家が建ち並ぶようになっていった。

保存地区は円弧状の湾に沿った山側^{ほんちようどおり}の本町通りと、地震により隆起した後に開削された三味線堀の跡地を埋め立てて整備された海側の浜町通り^{はままちどおり}に沿って町家が密に建ち並ぶ町場部分と、山麓に広がる寺院群、さらに保存地区の両端に位置する神社を含む範囲である。地区内には、通りに沿って敷地割された台形敷地に建つ、昭和30年頃までに建てられた町家を始めとし、社寺の堂宇^{どうう}等の伝統的建造物や、隆起した敷地を調整するために築かれたとされる石垣や寺社の石造物等が一体となって歴史的風致を形成する。主屋は二階建、切妻造平入の棧瓦葺^{きりづまづくりひらいり さんがわらぶき}で、通り側の二階のオモテニカイ(座敷)を広くとるために、二階全面を通り側に張り出し、室内側も吹抜けをもつ一階のオイエ(居間)の上部に張り出すという架構^{かこう}に地域的特色をみることができる。

佐渡市小木町伝統的建造物群保存地区は、17世紀初頭に金銀の積出港として成立し、17世紀後期から北前船^{きたまえぶね}の西廻り航路の寄港地^{きこうち}として繁栄した港町であり、自然の入江に沿って湾曲する砂州上^{さすじょう}に形成された町場の地割^{ちわり}を今日までよく残す。二階全面を通り側に張り出した表構えやオイエの吹抜け空間に採用された架構^{かこう}に地域的特色をよく示す。地震による隆起等、自然地形を巧妙に受け入れつつ計画された港町で、海運業で繁栄した港町の特徴ある歴史的風致をよく残す。



【写真1】円弧状の入り江に沿った町並み



【写真2】切妻造平入の町家が連続して建ち並ぶ

(写真1、写真2共に提供は佐渡市役所)



佐渡市小木町伝統的建造物群保存地区の範囲

【新規2】北信地方の製糸業の隆盛を伝える豪壮な主屋が建ち並ぶ近代の商家町

須坂市須坂伝統的建造物群保存地区

所在地 須坂市大字須坂字八木沢、字芝宮、字春木町、字中町、字新町、字常盤町、
字山崎、字上町、字横町、字宗石及び字青木の各一部

面積 約18.3ヘクタール

選定基準 (一) 伝統的建造物群が全体として意匠的に優秀なもの

須坂市は長野県北東部、千曲川右岸に位置する。須坂は市の北西部の長野盆地に位置し、群馬県境の山々から西に向かって流れる百々川、松川の間広がる扇状地上に立地する。

須坂は十字に交差する街道を中心に、江戸時代以前から交通の要衝として町場が形成されていたと考えられる。元和2年(1616)に須坂藩が成立した後、陣屋が置かれ、近世を通じて街道沿いの物資の集散地として栄えた。江戸末期から明治初期にかけて器械製糸業が始まり、明治8年には、県下に先駆けて小規模製糸工場からなる共同組織として製糸結社「東行社」が設立される。明治後期から大正期にかけて製糸業は全盛期を迎え、人口の増加と共に商業地化が進み、町は大きく発展した。街道沿いには重厚な大壁造瓦葺の店舗が建てられ、小路沿いには、長屋や小規模な住宅が高密度に建ち並ぶようになった。

保存地区は、大笹街道、谷街道及び山田道の交点である中町の辻を中心に、主に街道に面する区域で、須坂の旧中心部である。江戸後期から昭和20年代頃までに建てられた主屋を中心として、武家住宅、土蔵、製糸関連施設や寺社が一体となって歴史的風致を形成する。街道に面して店舗部及び住宅部からなる主屋を建て、店舗部は街道に開口部をひらき、住宅部は脇門を通り、通路を介して平入とする。店舗部は漆喰等で塗り込められた大壁造二階建、切妻造棧瓦葺で妻入と平入が混在し、明治期以降の主屋は、華やかな意匠を持ち、街道沿いの景観は変化に富む。また、製糸業で栄えた商家の建物などの基礎は、「ぼたもち石」と呼ばれる丸石を隙間なく積み上げ、繁栄の歴史をよく示す。

須坂市須坂伝統的建造物群保存地区は、近世を通じて十字に交差する街道を中心に発展した町場を基盤として、近代に製糸業の隆盛とともに商業地として栄えた町である。江戸末期から昭和前期にかけて建築された装飾的な意匠をもつ大壁造の商家や、町場の拡大に伴い高密度に建ち並んだ長屋、土蔵や寺社などの多様な建築物に加え、主屋の脇門やぼたもち石積み等の特色ある伝統的建造物が一体となって歴史的風致を形成し、北信地方における製糸業の隆盛をよく伝え価値が高い。



【写真1】街道沿いに大壁造の主屋が建ち並ぶ町並み

【写真2】妻入、平入の豪壮な主屋が建ち並ぶ町並み

(写真1、写真2共に提供は須坂市役所)



須坂市須坂伝統的建造物群保存地区の範囲